

京都キリスト召団だより 1980年2月号～1983年新年号

1980年2月24日～1983年1月6日

No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.	No.
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1			
1983年新年号 (1983年1月6日)	1982年夏季号 (1982年7月11日)	1981年11月・12月号 (1981年12月13日)	1981年9月・10月号 (1981年9月26日)	1981年7月・8月号 (1981年8月2日)	1981年5月・6月号 (1981年4月27日)	1981年3月・4月号 (1981年3月8日)	1981年1月・2月号 (1981年1月18日)	1980年11月・12月号 (1980年11月29日)	1980年9月・10月号 (1980年9月20日)	1980年7月・8月号 (1980年7月7日)	1980年6月号 (1980年5月25日)	1980年5月号 (1980年4月26日)	1980年4月号 (1980年3月28日)	1980年2月号 (1980年2月24日)			



京都キリスト召団だより

No. 1 1980年2月号

京都を離れて各地に離散し、ひとり祈りてある兄弟姉妹へ

1980年2月24日

奥田昌道

主にありて護られ、平安と力ある恵みの中にお過ごしと存じます。

1979年は、3月末頃に私が帰国し、4月から集会に舞い戻って参りました。京都キリスト召団の集会は、日曜日の聖日礼拝と水曜日の祈祷会と地道に祈りを積んでまいりました。

春5月19日、20日は小池先生を迎えての特別集会（於 大和屋旅館）、夏は8月24日から26日まで鹿沢での夏期福音集会、秋は11月24日、25日、再び同じ京都、大和屋旅館での秋期特別集会と、春・夏・秋の特別集会を通して、大いなる恵みに浴してまいりました。地方の兄弟姉妹方ともお会いできて、楽しい集会でありました。

1980年に入って、新しい兄弟姉妹が集会に導かれて参りました。また、旧友にもお会いすることができ、集会へお出でくださいました。エマオ会から集会へ出席するようになった山下信君、清瀬泉さん、近隣にお住まいの主婦阿部昌子さん、今年から集会所属を申し出られた旧友、渡辺正元兄（東レ研究所、この4月より甲南女子大教授に着任）、5年前1975年の12月に集会を訪ねられたメキシコ在住の玉川ウメノ姉（75歳）、姉は昨年11月入院治療のため帰国、京大病院に入院中ですが、令息玉川満兄に伴れられて三度、日曜集会に出席され、「み霊溢れるすばらしい祈りの集会だ」と喜んでくださっています。3月21日には、メキシコへ帰国されることになっていますが、京都の集会のことは、忘れ得ぬ恵みだと感謝してくださっており、病床にてもいつもテープを聴いていらつしやるのです。

京都のあの二階座敷の集会場は不思議と最近、いつもきつちりといっぱいになってしまっています。間もなく入りきらなくなってしまうそうです。

私は公務が忙しいものですから、日曜集会のための十分な準備もできません。土曜日の晩に祈って備えるだけです。ただひとつ、いつも平伏しの魂で主さまの前に出ています。平伏しの魂で集会に臨みます。あとは、み霊の主さまが善きようになさってくださいます。私はただ、絶対恩寵の主さまを告白しています。無条件絶対の恵みなる主キリストを！ 具体的には、それは十字架であり、聖霊のいのちであります。我々の姿如何に関わりなき絶対（対者を絶した）の愛の貫き、我々に義を与え（十字架）、愛を与え（聖霊）、キリストの相に生かしてやまない十字架愛、贖罪愛。十字架を荷なわしめ他人を愛せしむ聖霊の愛。自己中



心の「旧き我」の相から、「キリスト中心」の「新しき我」の相へとつくりかえてくださった！故に「汝の聖意を成させ給え。この私において、この私を用いて！」と提身の祈りができる。祈り入ろう、キリストの中へ。

マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四福音書のキリストの相を瞑想し、その中へ祈り入ることだと小池先生から教えていただきました。祈りの秘訣を身につけたいですね。待望の『詩篇珠玉集』（小池辰雄著作集第四巻）が刊行されました。素晴らしい内容のものです。先生の祈りがそこに告白されています。だから、この本を読んでいると自然に「祈り」へと導びかれます。読むことが即、祈りです。

京都大学でのエマオ会は、1979年6月12日（火）から始め、火、金の昼休みの時間に法学部の演習室（第四教室の上）を使って、続けてまいりました。20名ほどの諸兄弟姉が定着しました（内容は福音書を読み、語ってきたのですが）。12月21日（金）には、楽友会館で夕方から夜にかけてクリスマス祝会を、そして、今は学年末試験中ですが、試験の終る28日（木）3時半～8時、再び楽友会館で今年度最後のエマオ会をいたします。やはり20名近く参加予定です。

日頃、教室では時間も少ないし（昼休み実質30分くらい）、讃美歌を歌ったりできません。楽友会館ではたくさん讃美歌を歌いますし、祈りもできます。夕食を共にし、学生諸君に感話してもらいます。クリスマスの会では、大変祝福に満ちたよい会だったといつて、みんな喜んでくれました。そして、今度の28日の会を楽しみにしてくれています。だんだん気持ち一つに溶け合ってきました。

「然ればわが愛する兄弟よ、確かたくして揺うごくことなく、常に励むげみて主の事を務めよ。汝等その労の主にありて空しからぬを知らばなり」（コリント前書15・58）

西ドイツ・ハンブルクに留学中の錦織成史兄も心から喜んでくださっております。兄の祈りに感謝いたします。

小池先生には1980年2月7日、満76歳の誕生日を迎えられました。

「七六（南無）路の峠」と自ら仰っています。いよいよ霊に燃え、炎の如しです。

自作の讃美歌を昨年末頃より次々と作られました。その一部を別紙にてお送りいたします。『詩篇珠玉集』は直接、東京の刊行会宛、同封の振替用紙にて送料共3000円御振込にてお申込みください。

次号は西ドイツよりの「錦織兄のお便り」特集としてお届けいたします。お楽しみに！！



京都キリスト召団だより

No. 2 1980年4月号

1980年3月28日

奥田昌道

至高^{いと}く至上^{いと}なる永遠に住めるもの

聖者と名づくるもの かき言い給う

「我は高き所きよき所に住み

また心碎けてへりくだる者とともに住み

謙る者の霊を活かし 碎けたる者の心を活かす」(イザヤ57・15)

至高至誠の神は、どんな底的な平伏しの魂に、然り、碎けたる、ひれ伏しの魂に宿り給う。

悔い改めを要せぬ、神の子イエスが、悔い改めのできぬ我らに代わつて、洗礼者ヨハネよりヨルダン川にて悔い改めのバプテスマをお受けになった。水より上がり、祈りたまひしとき、視よ、霊界の天開け、聖霊鳩のごとくイエスの上に降り給うた。そして、天より声ありて曰く、

「汝は我が愛^{いとく}しむ子なり、我なんじを悦ぶ」(ルカ3・21、22)

ひれ伏しの、碎けの、無私の魂を、父なる神は無条件によりこび給うた。

神はイエスの中に、そして、イエスは父神のふところに。

イエスはいよいよ深く祈られた。祈り入られた。父の聖旨に聴き、聖意を行ぜんがために。聖霊に満ちて歩まれたイエス。御霊^{みたま}の御能力^{ちから}のみによつて御業^{みわざ}をなさったイエス。

「平れ伏し」の魂のイエス。「汝の聖意^{みこころ}を成らしめたまえ、この我において、この我を貰いて！」との提身の祈りのイエス。これが我が主キリストの実存のおすがたであった。

「汝らキリスト・イエスの心を心とよ。即ち、彼は神のかたちにて居給いしが、神とひとしくあることを固く保たんとは思わず、かえつて、己れを空しうし、僕^{しもべ}のかたちをとりて人の如くなれり。既に人のさまにて現れ、己れをひくうして死に至るまで、十字架の死に至るまで順^{したが}い給えり。

この故に神は彼を高く上げて、もろもろの名にまさる名を賜いたり。これ、天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、ことごとくイエスの名によりて膝をかがめ、かつ、もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言ひ表して、栄光を父なる神に帰せんためなり」(ピリピ2・5、11)

いつも平れ伏しの魂でいよう。十字架の碎けを賜つて！ 十字架で旧き我は片付けられた！ 上よりの臨み来たる聖霊は、碎けの霊、平れ伏しの霊、祈り入らしめる霊である。「平



れ伏し」「祈り入る」「聴き順う」ことが信仰の秘訣である。(奥田昌道)

錦織成史兄よりの便りから(その一)

(1) 1979年9月30日付(午前10時30分)

現地時間で7時15分前に霧の立ち込めるフルス・ビュッテル空港に着陸。ドイツの第一歩を踏みしました。出発まで先生また召団の諸兄姉には言葉に尽くせない御助力を賜りました。台風を停める程の祈りに支えられたのですから、心細くとも、その時こそ強くなりましょう。今、リユーネブルクのホテルに到着したばかり。静かな雰囲気にと緊張から解放されたところです。これからまたカタコトをぶらさげてハンブルクの街にひき返します。送別会、また空港までのお見送り等々、今、万感をもって想い出しつつ。

奥田昌道先生、召団の皆々様

錦織成史

(2) 1979年10月5日夜、リユーネブルクの下宿にして

こちらに來たのを機会に朝5時起床、聖書を読んで短く祈り、歩いて30分、ゲートに7時に着くという生活を始めました。……中略……こちらで、ルター夫人(Frau Luther)という大変親切な且つ親日的な婦人に出会いました。驚いたことに、マルティン・ルターの一統だということです。この人いわく、

『己れの如く他人を愛せよ』という非常に単純なことを実行することがどんなに難しいことか!』

と。とにかく、親切のかたまりのような人で、ある種の感銘をうけました。

〔編集者註…以下(3)～(10)の錦織兄のドイツ便りは割愛〕



京都キリスト召団だより

No. 3 1980年5月号

京都キリスト召団の各地の兄弟方へ

1980年4月26日
奥田昌道

万物復活の春を迎え、兄弟方には、主の御護りの中に健やかにお過ごしのことと存じます。学年末、学年の始めは、何かと忙しく、お便りをしようと思いつながらも、心ならずも御無沙汰いたしました。召団の近況と会員の異動をお伝えいたしました。

○3月30日(日)の集会を最後にして、玉川ウメノ姉はメキシコへ帰られました。姉は75歳ですが、内側は生命に溢れ、希望に輝いてられます。キリストの素晴らしさを体全体で表していらっしゃるような、慕わしい姉でした。どうか、玉川姉のことをおぼえ、彼地での御護りと御導きを祈つてあげてください。

○岡原剛兄は札幌地方裁判所へ転勤となり、住み慣れた奈良、京都をあとに旅立たれました。札幌での主の導きをお祈りいたします。

○山口の佐々木茂美兄が大阪地方裁判所へ転勤となり、御一家が大阪へ来られました。これから、京都キリスト召団の集会において祈りを共にしうることを心から嬉しく、また、召団のために心強く、感謝しています。

○3月22日に沢田(旧姓河野)眞理子さんに女兒誕生(恵子ちゃん)、また、3月26日には岡田(旧姓中坪)明子さんに女兒誕生、お健やかです。心からおよろこびし、お祝い申し上げます。

○今春、光野清兄は京都大学を卒業し、日本電池株式会社に入社、勤務地も京都と決まり、今後とも集会での祈りを共にすることができるとなり感謝。花田美弥子姉、この春同志社女子大学をめたく御卒業。しばらく京都の地にとどまることとなりました。目下、光野兄、花田姉は婚約中。この秋、聖名にあつて挙式の予定。どうか、お二人のために祈ってください。

京大では4月17日(木)から毎週木曜日お昼休み、エマ才会(聖書を読む会)を再開しました。4、5名の新しい方々を迎え、20名ばかりのものが集つて、「福音書」から聖言を食べ、飲まんとしています。どうか、祈りの中でおぼえてください。

今夏の夏期福音特別集会は8月22日(金)〜8月24日(日)、伊豆の「修善寺温泉」(「修善寺ガーデン」という素敵なところ)に決まりました。三島から電車で1時間、あとタクシー15分です。山上で、しかも富士山を望む風光の地です。

錦織兄の「ドイツ便り」(その二)を編集しました。兄の真心あふれるお便りに感謝いたします。たくさんの方々が喜んでくださっています。

〔編者註：錦織兄の「ドイツ便り」10通は割愛〕



京都キリスト召団だより

No. 4 1980年6月号

京都キリスト召団の各地の兄弟姉妹方へ

1980年5月25日

奥田昌道

1980年5月25日(日)、聖霊降臨節(ペンテコステ)を聖名にあつて祈りの中にお過ごしになったことと思います。

いつも祈りの中に思うことは、地方の兄弟姉妹たちが聖名にあつて護られ、一人ありても、堅く立って、祈りをもって聖日を守ってくださることです。京都ではいつも日曜日の集会毎に、また水曜日夜の祈祷会ごとに、あなた方のことを真剣に祈っています。そのことをどうか憶えていてください。

昨夜5月24日午後11時に錦織兄から電話をいただきました。あまりにも声が近く、京都のどこから掛かつてきたような音声のひびきでしたので、一瞬、兄が急遽帰国なさったのかと、いぶかり、きょとんとしていましたら、「ドイツの錦織です。ドイツの錦織で」と！「明日はペンテコステですから、ごあいさつを送ります。京都の皆様お元気ですか？」と元氣なハキハキとした兄の声でした。

ハンブルクでは午後3時(サマータイムで4時)とのことでした。地球の向こう、はるか彼方から京都キリスト召団へと挨拶を送ってきてくださった兄の思いに、ただ嬉しく熱いものがこみあげる思いでありました。私自身、西ドイツ、フライブルクで一年を過ごした体験から、彼地から日本を思いますのに、やはり遠き彼方という実感がするのです。心において、霊においていと近いのに、物理的・空間的距離においては本当に遠いのです。

だから、すぐそばからの電話のように聞こえた兄の声。霊界の消息を味わうような思いがいたします。姿は見えなくても、いと近いのです。

このように書いていますと、ピリピ書が浮かんできました。

「汝ら常に主にありて喜べ。我また言う、なんじら喜べ。……主は近し。何事をも思い煩うな。ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。さらば凡て人の思いにすぐる神の平安は汝らの心と思いとをキリスト・イエスによりて守らん」(第4章)

このピリピ書4章の冒頭において、パウロは

「この故に我が愛するところ、慕うところの兄弟、われの喜悦、われの冠たる愛する者よ、斯くのごとく主にありて堅く立て」

と励ましています。このパウロの思いが京都キリスト召団の兄弟姉妹に対するわが思いであり、



我ら互いの思いなのです。

「われ新しき誠命いましめを汝らに与う。汝ら相愛あいすべし。わが汝らを愛せしごとく汝らも相愛すべし。互いに相愛することをせば、これによりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん」(ヨハネ13・34～35)

訣別にあたって、弟子たちに語られ、弟子たちに与えられた唯一つの誠命は、この愛の誠命でありました。みたまの最初の名は「愛」であります。みたまは「愛」の霊であります。互いに祈りあい、執り成し合つてゆくのです。

「みたま自ら云い難き呻きをもて執り成し給うなり」(ロマ8・26)
みたまにある愛は一切に勝ちます。

今日のペンテコステ集会の祈会にて与えられた聖句。エペソ書第1章13～14節です。

「汝らもキリストに在りて真まことの言、すなわち汝らの救いの福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にして印せられたり。これは我らが受くべき嗣業(天国)の保証にして、神に属つける者の贖われ、かつ、神の栄光に誉れあらんためなり」

どうか祈り心でこの聖句をかみしめ味わってください。これが我らの賜つていところの事態なのです。一語も無駄はありません。よく味わい、そして、感謝してください。聖名を讃えてください。

「汝らは恩恵めぐみにより信仰によりて救われたり。これ己れに由るにあらず、神の賜物たまものなり。行為おこないに由るにあらず、これ誇る者のなからん為なり。我らは神に造られたる者にして、神の預め備え給いし善き業に歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたるなり」(エペソ4・8～10)

6月7日(土)・8日(日)の春期特別集会及び講演会が近づきました。どうか、祈りをもつて準備し、祈りをもつて参加してください。燃ゆる火のごとき集会となることでしょう。新しき魂が導かれ、キリストのものとなされますように。

○祈りつづけてきました藤井のぞみ姉の健康守られ、予定日より半月ほど早くなりましたが、5月19日、無事男子出産。「道」と命名されました。長男「光」君、次男「安」君三男「道」君に祝福豊かならんことを！ のぞみ姉の健康が今後も守られ、回復されますように。御加禱をお願い申し上げます。ご出産ほんとうに感謝でした。

○広瀬末子姉の御令息ご夫妻(アメリカ在住)に第二子(男子)が5月20日に誕生、心からおよろこび申し上げます。

6月7日・8日の特別集会以外は、京都キリスト召団集会所(奥田方)です。新しい方もどうかお出でください。水曜日は夕方7時15分～9時、祈祷会です。小池辰雄先生の日曜日の聖書講筵・エレミヤ書を聴いています(テープ)。来会お待ちします。

「ドイツよりのお便り」 錦織成史兄よりは割愛



京都キリスト召団だより

No. 5 1980年7月・8月号

1980年7月7日

奥田昌道

1980年も前半が過ぎ早、真夏の7月を迎えました。主にある諸兄姉には、炎暑の中も主の御護りの中、お健やかにお過ごしのことと存じます。

1980年の春期特別集会は、去る6月7日、8日、京都大和屋旅館で開催されました。信州（小山・横山両姉）、四国（森下夫妻）、埼玉（増田・針谷兄、石川・清水・吉岡姉）、東京（喜多村・沢田・樋口・牧田・東海林・金谷兄、望月・永野姉）など遠来の参加者含め、大阪・奈良・京都を合わせて60名ばかりの集会となりました。

第一日（7日）は、第1回が「足を洗う」（ヨハネ伝13章）、第2回が「ガラテヤ書の奥義」（いづれも小池辰雄先生）、第二日（8日）、御所で早天祈祷会は雨上がりの光差しくる中で詩篇36篇を小池先生の著作集第四巻『詩篇珠玉集』の名訳によりつつ導かれ、10数名のものが一つ思いとなつて深く祈り恵みに浴しました。

「エホバよ、あなたの愛憐は天に漲り、あなたの信実は雲にまで及ぶ。……そは、生命の泉はあなたの許にあり、あなたの光の中でこそ我らは光を見るから。」

午前の集会は9時30分～11時まで、感話・証言の集い、午後の公開講演会を控えているために、11時をもつて打ち切らねばならず、語っていたきたい方々に十分に感話していただけなかったことは心残りでありました。

特別集会の標語は、

「我らは聖霊により信仰によりて、希望を抱く」（ガラテヤ5・5）

でありました。

「足を洗う」及び、午後の講演会の「聖書はドラマである」（小池先生）及び、「生命の泉」（奥田）の要旨は、近く刊行されます『エン・クリスト』創刊号に掲載されますので、それによつて、集会、講演会を御想像ください。

ちなみに、『エン・クリスト』は従来の「ハレルヤ」誌に代わって、今夏より刊行され、キリスト召団の福音伝道誌として、小池先生の文章を中心としつつ、各召団の様子や証言などを織り込みつつ、年四回の発行を目標として新しくスタートするものです。

私は、小池先生にくれぐれも平易な文章で、口語体で（話し口調で）みなさんに呼びかける気持ちで書いてくださるよう、お願いしております。そして、同誌が福音伝道のために大いに用いられますことを願いますと共に、我らもその目的のために力を尽くしたいと願つ



ております。

さて、8日(日)の午後の講演会は大変、盛会でした。京大会館の講演室がちょうどいっぱいになり、ほぼ150名くらいの参加者がありました。「聖書はドラマである」では小池先生は、聖書の年表や天国・地獄・煉獄などの図や、いろいろの図を用意され、講演室の前壁一杯に貼り付けて、それを一々指し示しながらの熱演で、まともにお話になれば、5、6時間あっても足りないようなものでした。風の如く、火の如き、自由自在なお話しぶりに、聴衆は深く感銘を受けました。しばしば異言が口をついてほとばしり出で、先生はそれを押さえるのに苦労されている御様子でした。語り手と聴き手とが一つにとけ合うことのできた、充実した講演会となりましたことを心から嬉しく思い聖名を讃えます。

京都キリスト召団の集会の方は、4月の末から新しく徳廣敦子姉、6月からエマ才会の方から宮本博夫兄(法・3回生)、久代妙子姉(文・聴講生)が加わり、活気にあふれ、楽しく歩みをつづけています。次々と新しい若い魂が加えられていくことは、大きな喜びであり、励まします。6月はヤコブ書を学んだのち、7月からはヨブ記を学びはじめています。

「エホバ与え、エホバ取り給うなり。エホバの聖名は讃むべきかな」(ヨブ 1・21)

左のように8月は17日のみ定例集会を行い、他は休みます。8月22日(金)〜24日(日)は伊豆修善寺にて夏期特別集会です。水曜祈禱会は、京都キリスト召団集会所にて「エレミヤ記」(小池先生)をテープで聴いています。8月の祈禱会は臨時に休会となることがありますので、御出席の方は予め電話で確かめてください。

讃美歌527番「わがよろこび、わが望み」

1. わがよろこび、わが望み

わがいのちの主よ

昼たたえ、夜うたい

なお足らぬを思う。

4. 主の御顔のやさしさに

みつかいよろこび

みことはのうるわしさに

あめつち歌えり。

5. ならばもなき愛の主の

みこえぞうれしき

わが望み、わが生命は

永遠に主あれや。ハレルヤ!



京都キリスト召団だより

No. 6 1980年9月・10月号

地方在住の主にある諸兄姉へ

1980年9月20日

奥田昌道

早や秋風の吹き始める頃となりましたが、いかがお過ごしですか。私の周辺の事情により、召団だよりを発行しますのが大変遅れ、諸兄姉には心待ちにしておられたことと存じます。夏期福音特別集会は8月22日～24日、伊豆修善寺の修善寺ガーデンを会場として行われました。鹿沢にくらべ、会場が手狭であったため、会の運営にあたられた東京召団の諸兄姉にはたいへんな御愛労をおかけいたしました。また、小池先生には熱気のこもる会場にて汗だくになりながら、各回の御講筵に当たっていただき、ゆつくりくつろいでいただく間もあまりないような状況でした。にもかかわらず、先生は「無の神学の聖書的根拠」の御講筵を白熱的に展開してくださり、御用意なされた内容の何分の一かしか、うかがい得ませんでした。その要旨は「エン・クリスト」第2号（今年10月中に刊行予定）に掲載されます。

京都から新しく、玉川満、森満夫、徳廣敦子、久代妙子、清瀬泉の諸兄姉が参加しえたことは、大いなる感謝でありました。また、この特別集會に「エン・クリスト」創刊号が東京召団の諸兄姉の愛労で間に合つて完成し、手にすることができました。京都特別集會の特集号となつおりますので、御覧いただきたいと思ひます。また、伝道用に大いに御活用いただきたく、お申出くださればお送りいたします。

京都の集會では、ヨブ記をつづけて学んでいます。9月21日（日）をもつて終る予定です。が、ヨブの苦難とその真摯な姿を通して、またこれを福音の光から受けとることによつて、学ぶところ大でありました。ヨブ記の次は、ヘブル書を予定しています。

9月28日（日）午前11時～12時、「くに莊」にて私の司式により、光野清・花田美弥子の結婚式をとり行います。また、祝賀会を午後2時～4時に同じ会場で行います。どうか、祈りのうちにおぼえ、二人を祝福してあげてくださいますよう。

【京都キリスト召団集會のあゆみ】（講筵主題） 1980年6～9月

6月1日（日）御霊による歩み（ガラテヤ書5章）

6月7日（土）～8日（日）春期京都特別集會・講演會

6月15日（日）御霊の賜物（コリント前書12章）

6月22日（日）生命の御霊の法（詩篇51、ロマ書8章）



- 6月29日(日) ヤコブ書の精神(ヤコブ書1〜4・10)
- 7月6日(日) ヨブ記(1)「無者の相」(ヨブ記1〜7章)
- 7月13日(日) ヨブ記(2)「仲保者」(ヨブ記8〜9章)
- 7月27日(日) ヨブ記(3)「我を贖う者は活く」(ヨブ記9〜19章)
- 8月17日(日) 「一切の秘訣」(ピリピ書4章)
- 8月22日(金) 24日(日) 東京キリスト召団主催第27回夏期特別集会(於伊豆修善寺)
- 9月7日(日) ヨブ記(4)「ヨブの嘆き」(ヨブ記20〜31章)
- 9月14日(日) ヨブ記(5)「苦難の意義」(ヨブ記32〜37章)



京都キリスト召団だより

No. 7 1980年11月・12月号

地方在住の主にある諸兄姉へ

1980年11月29日

奥田昌道

1980年もあと一月を余すのみとなり、主の御降誕を祝うクリスマスも近づいてまいりました。主にある兄姉の皆様、お健やかにお過ごしのことと存じます。冬の厳しい西ドイツのハンブルクでは、もう雪につつまれる日の多いことでしょう。太陽を見る日が少なくどんよりした曇り空、また、雪空の日がつづくことでしょう。二年目の冬をお迎えになるわけですが、兄に対する我らのあつき祈りは絶ゆることはありません。はるかかなたの空に運ばれていることを確く信じ、祈りの中で、みたまにあつて、兄と一つであることを思っています。厳しい冬にあつて、御健康の守られてあることを切に祈ります。

札幌、信州においても寒さの厳しくなる季節、どうか、主の御力に護られてお健やかでいてください。

さて、今年の秋の京都特別集会は、11月22日（土）、23日（日）、一泊二日をもって例年のごとく鴨川べりの大和屋旅館を会場として開催されました。高校生以上の参加者数は、小池先生を含めて84名、そのうち京都キリスト召団の会員は32名、遠方からは懐かしい永田健太郎・和子御夫妻、信州から横山姉、東京召団からは喜多村・沢田・東海林・金谷・茶谷・松本の諸兄、市川・望月・山県・滝沢の諸姉、埼玉召団から石川姉、裾野召団から増田・松井両兄、それに今回は岡山から赤木・麻山両兄、斎藤・久住の両姉という多数の参会を見、嬉しいことでした。京都召団では森下夫妻御一家が四国から、広瀬兄が名古屋から来会、みたまの恵みを共にすることができました。

今秋の特別集会は22日（土）の午後4時から翌23日（日）の午後3時まで。短い時間ではありましたが、内容的には実に濃密な重厚な充実した特別集会となりました。

第一回（22日午後4時～6時）は私の司会で先生の講筵は、

「パウロの信」ガラテヤ書3章1～14節

を機軸としてまことの「信」の事態——それはみたま（聖霊、御霊）が中心であり、みたまの事態であります——がいかなるものかを自在に力強く展開されました。

「汝らが御霊を受けしは律法の行為に由るか、聴きて信じたるに由るか」

「御霊によりて始まりしに、今、肉によりて全うせらるるか」

「然らば、汝らに御霊を賜いて汝らの中に能力ある業を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか」



これらのみ言葉の内実がどんなに深い豊かなものであるかを小池先生は御自身の信仰生活五十年の中から語り出された。私はまことに目を見張る思いで、全く新しく聴く思いで聴き入りました。聴き入ることは直ちに、キリストの中に信じ入ること、祈り入ることでもあります。語られているのは、もはや先生ではなく、みたまのキリストであります。私は、語りつつあられる先生が天上人であって、身は完全に天界にある方がしばし、身体を宿として地界に降り来たり、天界の消息を告白、展開しておられる。そのように思えてなりませんでした。だからこそ、先生が十字架、みたまの事態に念いを致し、それを語り出さんとされるやいなや、おさえがたく異言、靈言が噴出してしまふのです。いかに先生が十字架と一如であり、みたまに貫かれておられるか。「無」の事態を体得しておられるかに驚嘆いたします。しかも、先生は、「無」は自分で獲得するものではなく、(自分からそうなるとして「無」となるのではなく)、賜りたる「無」、十字架が絶対恩寵として与えてくださっている「無」であることを明言しておられます。故に、質的には誰もが先生と同じ事態にあずかりうるわけです。では、どこが違うのか。祈りの深さです。みたまの秘訣は「祈り」にあります。祈りとはお願いではなく、全存在をぶちまけて、みたまのキリストの中へ、自分を投げ入れること。「主よ!」との全存在の叫びをもって、(たとえ沈黙でもいい、沈黙の雄叫び!)主キリストの中へ投げ身すること(海水浴で飛び込み台から大海の中へとおどり入るように、キリストという大海のふところへ投身していだかれる)、このキリストは十字架のキリストである。

「十字架につけられ給いしままなるイエス・キリスト」(ガラテヤ3・1)

先生の第一回の御講筵から抜粋してみましょう。

「十字架につけられたキリストは十字架からおろされた。しかし、世界の終りにいたるまでキリストの十字架は我らに臨み迫っている。魂は本当の現実にはぶつかるまではどうにもならない。本ものにぶつかり、本当の現実に入ると、もうあとはどうでもいい。……キリストはいきなり天界に行けた人だ。しかも、キリストには受くべきバプテスマがあった。キリストはヨハネからの(洗礼者ヨハネのこと)、水のバプテスマと、そのとき同時に天界から受けられた聖霊のバプテスマのほかに、十字架のバプテスマ、血のバプテスマがあった。これは死へのバプテスマであつた。聖霊は生命^{いのち}へのバプテスマ。十字架は死へのバプテスマ。何のためのこのバプテスマか! 聖意を体現して、聖意を一切とし、己れを否として、聖意を行ぜられた義人なるキリストが、罪人^{つみびと}なる我らが受くべき「神の審き」を全部引き受けてくださったのだ。

「義」とは聖意体現の事態をいう。神を然りとし、自己を否とする。聖意を百分て、我意は百分棄てられている事態。聖意がこの身において貫かれている事態。それができたのはキリストだけ。我々は手放しではできない。それが「罪」である。



「信」とは全存在で受けとることである。自分の側をすっかり投げ棄てる。キリストの言、行為をそのまま受けとることが信。なぜなら、キリストこそは神の言であり、神の現象体であり、道であるから。このキリスト、その言、行を百%受けとる。これが信ずるということだ。だから、大変なことだ。こんな「信」は我々には無い。我々は信ずることすらできないのだ。「信仰によって義とされる」と言い、人は簡単に「信ずる」と言うけれども（信じているような顔をしているけれども）、我々には「信ずる」ということは本当にはできない！

イエスだけが信ずることができた。そのイエスは自分を何者ともしていなかった。それが「霊の貧しき」だ。霊が貧しいから、あんなに豊かだった。キリストこそが本当の「信」だった。「信」の化体だった。その「信」をお前にやるよ、というのが十字架の恩寵だ。

キリストは本当に神を受けとって、神を体現していた。これが義だ。だから、信（神を百%受けとること）と義（神の聖意が百%貫徹されること）とは一つだ。「信」が成就している事態の実質（内実）は「義」だ。信義一如だ。

キリストは神の中に信入した。そうしたら、行為（聖意体現の）に転じた。これが義人だ。

信入、行転一如の世界である。なぜ、行転できるか。神の力が来るから。力とは何か。聖霊である。みたまほどの力はどこにもない。展開してやまない。

だから、全存在で聴いて、本当に身体で受けとった。そうしたら、みたまがやって来た。「聴きて信じたるに由る」とはそういう深い消息だ。キリストがそうだった。全存在で神の言を体受し、みたまを受けられた。だけど、我々にはそれが手放しではできない。そこに十字架がある。「自分が引き受けた。心配するな」、これが十字架である。この十字架にぶつ倒されることだ。全存在で降参することだ。十字架に降参しない人はみたまの現実に入れない。

「神の審き」を全部キリストが引き受けた。悟りの世界とは違う。恩寵なのである。「我キリストと共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず、キリストわがうちに生き給う」

とは、キリストのみたまがわが中に生き給うということだ。「罪」の無くされたところにみたまが与えられる。イエスは十字架の血のバプテスマをお受けになるまでは、みたま（火）を投ずることができない。だから、十字架の贖い（贖罪）を終え、復活、昇天なさる前に「祈り待て」と命ぜられた。

十字架の土台の上に聖霊が来るのであって、十字架抜きには絶対に聖霊は来ない。十字架抜きの霊は聖霊ではない。あがないを本当に受けとったところには聖霊が来る。本当に受けとらないと聖霊は来ない。その道は「祈り」である。



十字架に開かれたる門の中に祈り入る。聖霊が来る。キリストに圧倒されてく
ださい。」

ここにはほんの一部を抜粋しました。大切な箇所です。先生は自在に語られ、講筵の中
で、オイゲン・ヘリゲルの「弓と禪」の話を引かれました。素晴らしく感動的なお話でした。
その内容を今ここに紹介するゆとりがありませんので、別の機会といたします。私は「弓
と禪」という名著に思いを致さしめてくださったことに深く感謝しています。

特別集会が終ってから、この「弓と禪」をとり出してみました。昔、梅村康太郎兄が私
にくださったのです。扉のページに次のように記されていました。

「神は愛なり、愛に居る者は神に居り、神も亦かれに居給う（ヨハネ第一書
4・16）

わが奥田先生の誕生を祝して 1968年9月28日

無宿

梅村兄がキリストへと導びかれたのは、この年でした。本書は1968年2月10日発行、
東京の「福田出版」という出版社から刊行されたものです。無宿^{やどなし}とは兄のこと。今にして、
兄のあつき友情を思い、感動をもって本書を読みつつあります。諸兄姉もぜひ御一読くだ
さい。

残念ながら、特別集会の記事は詳しくは次号にゆずります。（「エン・クリスト」第3号
1981年2月刊行予定、にも特別集会の模様を掲載いたします）。ただ、プログラムだけ。第二
回（22日晚7時30分〜9時30分）は梅村兄司会、講筵は「ヨハネの愛」。23日（日）早天祈祷
会は例のごとく、午前6時15分、大和屋旅館前集合、あの御所の木立ちの祈り場へ。出掛
けるときはまだ夜が明けきっていませんでした。晴れ渡った空にたなびく朝の雲、朝の陽
光を受けて金色に輝く様は、天界に思いを馳せて祈るにふさわしい情景でした。いちよう
の黄葉、その落葉が地面を黄金色に染めていました。

第三回集会は午前9時30分から私の司会で、講筵は「ペテロの望」。実にパウロ、ヨハネ、
ペテロの三使徒を通して、キリストの信・愛・望の事態が一つの交響楽のごとく奏でられ
ました。夏期特別集会のごとき充実感を味わいました。午後の感話会は短い時間でしたが、
岡山の斎藤佳子さん（エン・クリスト第二号の証言参照！）の活ける生命の泉をからだの中に
与えられたという。そして作品が湧き出て溢れてやまないというお話。大阪の夫君^{ぶふう}の楽しい、
しかし率直真剣な感話（爆笑に次ぐ爆笑を誘い、会場は天的笑いに包まれ感謝！）等、時の経つ
のを忘れるものでした。

御講筵にあたつてくださった小池辰雄先生、遠路はるばる参会してくださった兄弟召団
の諸兄姉方、集会の準備、運営に献身してくれた京都の兄姉達に心からの感謝をここにあら
わしたいと思います。

集会の標語

「**充ち溢るる神性は悉く形体を成してキリストに宿る**」（コロサイ書2・9）



第一回「信入行転」、第二回「愛抱捨身」、第三回「望生放光」。

小池辰雄先生作詞・召団讃美歌は、以前に作成の讃美歌集（1～15）にその後の作詞分16～24を加えて、新訂版「讃美歌集No.1」（1980）が完成しました。会員におわちいたします。なお、京都特別集会のあと早速に今回の集会にちなんで、次のような作詞をお届けくございました。

27番「信じ入れよ」（讃美歌514「よわきものよ」の調べ）

1. 信じ入ればみ力を得
行に転じ人を助く

（おりかえし）

主、に、在、り、て、力、あ、り、
主、の、み、霊、こ、そ、原、始、力、ぞ、

2. 主に愛され抱かれなば
捨身の愛われにみつる

3. 新天地の望みに生く
主の光を四方に放つ。

（1980年11月27日午前10時作）

（消息蘭）

○9月28日、光野清兄、花田美彌子姉、ご結婚（「聖光の輝く野辺に清らけく咲くコスモスの彌よ美しき」小池辰雄先生作）。古城秀信兄、9月末をもつて故郷（大分県）へ帰られました。土屋文昭・晶子御夫妻に9月23日、隆一郎君誕生。ハレルヤ！心からお祝いとおよろこびを申し上げます。



京都キリスト召団だより

No. 8 1981年1月・2月号

地方在住の主にある兄弟姉妹方へ

1981年1月18日

奥田昌道

今年はこのほか厳しい寒さが続きますが、お健やかに新年を迎え、新たな意気をもって、新しい年の歩みを踏み出されたことと存じます。

ふり返れば、昨年一年、京都キリスト召団は、思いにまぎって主キリストのあつき御顧みに支えられ、祝福されて歩むことができました。地方の皆様との交流、テープを通し、便りを通し、励まし合って参りました。どうか、京都ではいつもあなた方のことを篤く思い、祈っていることをおぼえていてください。

昨年の12月21日(日)の京都キリスト召団のクリスマス集会は、二階座敷の集会所が隙間もないほどいっぱいになってしまいました。30名もいたでしょうか。嬉しい悲鳴でした。主を求める魂をみたまの主が導いて呼び集めていてくださるのです。クリスマス以来、エマオ会から新しく二人の兄弟が、また本日(1月18日)の日曜日の集会から、さらに一人の兄弟がエマオ会から参加し、これから後、一緒に聖言・御霊にあずかる歩みをつづけることになりました。どうか、これら新しき魂のために祈ってください。お願いいたします。

エマオ会といえ、昨年12月18日(木)の晩に楽友会館でクリスマス会をいたしました。20名の諸君が参加、食後の感話会で一人づつ所感を語ってくれました。一人一人がほとんど例外なくこの一年間、エマオ会に出席しているうちに自分自身が変化して来たと語ってくれ、とても楽しい会でした。見えざるところでみたまの主が確かな御手をもつて働いていてくださるのです。

「主は即ち御霊^{みたま}なり、主の御霊のある所には自由あり。我らは皆、顔おおいなくして鏡に映るごとく、主の栄光を見、栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像^{かたち}に化するなり。」(コリント後書3・17～18)

今年もさらに祈りを深くして進みましょう。主が大いなることをなしてくださるでしょう。新年1月4日(日)の集会ではイザヤ書60章～62章によつて大いなる望みを賜いました。

「起きよ、光^{はな}を発て、なんじの光きたり、主の栄光なんじの上に照り出でたればなり。視よ、くらきは地をおおい、闇はもろもろの魂をおおわん。されど汝の上にはエホバ照り出でたまいて、その栄光なんじの上に顕るべし。もろもろの国は汝の光に往き、もろもろの王は照り出る汝が光輝^{かがやき}に往かん」(イザヤ書60・1～3)



1月18日(日)の聖句、エレミヤ書より。

「エホバかくいい給う。智慧ある者はその智慧に誇る勿^{なか}れ。力ある者はその力に誇る勿^{なか}れ。富める者はその富に誇る勿^{なか}れ。誇る者はこれをもて誇るべし。即ち、さとして我を識る事と、わがエホバにして地に仁^{めぐみ}恵と公道^{おおよけ}と公義^{ただしき}とを行う者なることを知る事なり。我これらを悦ぶなりとエホバいい給う。」
(エレミヤ9・23～24)

主はこう言われる。

「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人はのろわれる。彼は荒野に育つ小さい木のよう、何も良いことの来るのを見ない。荒野の干上がった所に住み、人の住まない塩地にいる。おおよそ主にたより、主を頼みとする人はさいわいである。彼は水のほとりに植えた木のよう、その根を川にのぼし、暑さにあっても恐れることはない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂えることなく、絶えず実を結ぶ。」(エレミヤ17・5～8)

どうか、みたまのキリストがわれらの一切でありますように。この一年を力強く導き給わんことを！

「ヨハネの愛」——愛抱捨身—— 小池辰雄先生

(1980年秋期京都特別集会(11月22日(土)～23日(日))第二回講筵要約)

第二回集会の主題は、

「ヨハネの愛」、ヨハネ伝14章から。

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ」(14・1)

キリストの訣別のすごい言葉です。人間はすぐ心が騒いだり、疑ったり、心配したりする。これは信仰の世界では禁物。意識過剰はだめ。「我を信ぜよ」は

「わたしを受けとれ」

との意。「わたしが神の子であることを信ぜよ」なんてことではない。ヨハネ伝14章以下はすごいところ。暗記してもよい。ただし、頭で暗記したってだめだよ。ヨハネ伝は霊的実存者たるキリストを語る。

「心を騒がすな！」という、すぐ、ひとは整えようとする。そうじゃないんだ。

「騒いだまま、疑ったまま、その自分をぶちまけよ！ そのままの姿でいいから、わたしに信じ入れよ！」

ということだ。「信入」である。

「わが父の家には住^{すみ}処^か多し」(14・2)

宇宙の広大さに対する地球の、また人の小ささよ。キリストを受けとれば宇宙的な魂と



なる。われらはキリスト直結である。立ち帰ることだ。原始に帰ること。ヘブライ語で「シユーブ」という。帰入、祈入だ。神に信入せよ、我に信入せよ。

ヨハネ黙示録3章20節で

「視よわれ戸の外に立ちて叩く。人もし我が声を聞きて戸を開かば、我その内に入りて彼とともに食し、彼もまた我とともに食せん」

とキリストは言っておられる。あけつばなしの魂になりなさいよ。

「われ汝らのために処を備えに往く。……復^{また}来りて汝らを我がもとに迎えん」
(14・3)

「復来る」とは、

「聖霊としてやってくる」

ということ。「往く」とは、

「十字架という門を通って往く」

こと。キリストは十字架を通らなければ父のみもとへ行けなかった。贖罪死を遂げなければ。文字通り「生命賭け」であった。十字架を負う者が本当のことをする。十字架を負うことは、聖霊が来なければならない。召団讃美歌(7)にあるでしょ。

「みたまの我が主はわが身を抱き、十字架に耐え得る力を賜う」

キリストに信入したら、天地一如である。死んでからではない。今、すでにそうである。地上にありながら、天上にある。そういうギリギリの絶対境に入らないと、私の魂はやりきれないのだ。

「我は道なり、真理なり、生命なり」(14・6)

私こそは道だ、真理だ、生命だ。この「道」「真理」「生命」には定冠詞がついている。真理を概念的につかまえようとしたらだめだよ。いつまでたっても始まらない。概念で把握することのできないものが真理だ。道も然り。無道の道。自分で体得してみないとわからない道。

「わかるような神は私の神ではない」

とドイツのある神秘家は言った。不可解なるが故に信ずるの意だ。人生は不可解、世は不公平、だから、ドラマだと言うのだ。それでいいというのではない。しかし、事実である。その事実の奥に根源現実がある。必ず歴史の終り、新天地到来の時に、神を信じてよかつたと言える。いちばん不合理なことを負ったのはキリストでないか！ 十字架！ この不合理——それほど人間はどう仕様もないのだ。宝血はこんこんと流れている。流れても尽きない血、活かす血。

「わが血を飲め、わが肉を食らえ」

と仰った。毎日がそうであれよ、ということ。もちろん、飲む食らうとは霊的な意味のこと。



「我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし」(14・6)
キリストという道は非常に狭く、かつ非常に広い。「生命賭け」という点で狭い。豊かさという点で廣大無辺！

「私の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝らに言う言葉は、己れによりて語るにあらず、父われに在して御業を行い給うなり」(14・10)

キリストは、

「我何事も為し能わず」(5章)

「何事も言う能わず」(14章)

と言っている。これは100%そうなのだ。父がなし給う。自分じゃない。

十字架という門から我らは入る。入ったら、聖霊の世界。霊的変化が起こる。ひとりですく祈りなさい。

「我を信する者は我がなす業をなさん。かつ、之よりも大いなる業をなすべし」

(14・12)

信入すれば、もつと大きい業をキリストが為し給う。聖意体现の祈り(この身を通して汝の聖意を成らしめ給え、の祈り)に提身しているのが僕の姿。相手が絶対者だから、僕となれば自由になる。自由とは、神の法に即する事態にある。何の自由か、人を愛する自由、愛への自由。

「汝らがわが名によりて願うことは、我みな之を為さん。父、子によりて栄光を受け給わん為なり。何事にても我が名によりて我に願わば我これを成すべし。……我、父に請わん。父は地に助け主を与えて永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。これは真理の御霊なり」(14・13～17)

信入、信交の世界は聖霊の愛の世界。愛の聖霊の事態。愛は一切に勝つ。十字架の愛。ロマ書8章に充溢している、みたまのキリストの愛。

「神われらの見方なるが故に、誰か我らに敵せんや」

キリストの中へは遠慮なく信入また信入。一如となつてください。生活そのものが祈り、讚美、呻き、そしてこれら全部が愛。

愛抱捨身。キリストの愛で包まれて、捨身となる、捨身の愛。今は世の中には保身的なことばかりが横行している。「犠牲」の精神はなくなってしまった。

キリストとともに十字架を負う聖霊の力。パウロさんを見よ。コリント前書13章の愛はキリストの愛、聖霊の愛だ。地上の人生は唯一回かぎり。だから、本当の生き方をするのだ。そういう気合で生きれば神様は助けなされる。聖霊の火は愛の火だ。また何をか要せん。そうすればパラダイスだ。人にパラダイスを分かち与えるパラダイス。

「のみ、しらみ、音に鳴く秋の虫なれば、わがふところは武蔵野の原」(良寛)
のみやしらみも、いとおしくふところに抱いてやっていた良寛和尚の突き抜けたたまし



い、すばらしいよ。

1980年秋期京都特別集会の模様は近く刊行の「エン・クリスト」第3号に記しました。第一回集会が中心ですが、味読されますように。

(消息蘭)

○大野忠士兄、英語研修のため1月・2月中、東京へ。その間、東京キリスト召団の交わりを得られ感謝です。どうぞよろしく。

○小池辰雄先生、2月7日、77歳(喜寿)のお誕生日を迎えられます。おめでとうございます。いよいよ、みたまの炎、旺盛に！

○橋本伸子姉、南里一博兄の導きで昨年12月7日(日)より来会。藩慎一郎(京大法4回生)、竹内薫(京大農、大学院修士過程1年)、昨年クリスマスから。木原伸夫(京大法4回生) 今年1月18日(日)から。いずれもエマオ会より来会!!

【京都キリスト召団集会のあゆみ】(講筵主題) 1980年9月～1981年1月

9月21日(日) ヨブ記(6)(完)「まことの信仰」(38～42章)

9月28日(日) 光野清・花田美彌子結婚式

10月5日(日) ヘブル書(1)「御子による救い」(1～2章)

10月19日(日) 祈会

10月26日(日) ヘブル書(2)「神の安息」(1～2章)

11月2日(日) ヘブル書(3)「大祭司」(4章14～5章)

11月6日(水) 特別祈祷会(小池辰雄先生)「十字架の言」(コリント1・18～31)

11月9日(日) ヘブル書(4)「靈魂の錨」(6章)

11月16日(日) ヘブル書(5)「永遠の祭司」(7章)

11月22日(土) 23日(日) 京都秋期特別集会

11月30日(日) 秋期特別集会感謝会「信入行転」

12月7日(日) ヘブル書(6)「永遠の贖罪・永遠の聖霊・永遠の嗣業」(9章)

12月14日(日) ヘブル書(7)「至聖所」(9章23～10章25)

12月21日(日) 降誕節「救い主の降誕」

1981年

1月4日(日) 新年集会「栄光・讃美、歓喜」(イザヤ60～62章)

1月18日(日) ヘブル書(8)「信の実体」(10章26～11章16)



京都キリスト召団だより

No. 9 1981年3月・4月号

地方在住の主にある兄弟姉妹方へ

1981年3月8日

奥田昌道

厳しい寒さの冬もややに過ぎ去り、降り注ぐ陽光に春のきざしを感じるこの頃ですが、主にある各地の兄弟姉妹の皆様、御力に守られて健やかにお過ごしのことと存じます。

どんなに冬が長く、厳しく、辛くとも、必ず春はめぐってくる。輝く陽光とともに万物が芽生え、息吹きし、生命にあふれる春が必ずやって来ます。このことを思うだけでも何たる大きな慰めでしょうか。

試煉の中にある兄弟姉妹よ！ 主は決して試煉の炉の火を熱すぎるように、また絶え難く長過ぎるようにはなさらない。十字架の主様に投げ身して、みたまの主様にいだかれて、力をいただき突破していただく。

京都の聖日集会は、2月22日（日）をもってヘブル書をひとまず終え、3月1日（日）からはペテロ書翰に入りました。希望の使徒ペテロの書をとおして、また福音書、使徒行伝のペテロの姿をとおして、私達は主様の中への投身、托身、祈入の秘訣を体得させていただきたいと願っています。直情径行、人間味あふれたペテロの姿は親しみを感ぜさせてくれます。

「讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大いなる憐憫に
したが、イエス・キリストの死人の中より甦えり給えることに由り、我ら
を新たに生まれしめて生ける望みを懷かせ、汝らのために天に蓄えある、朽
ちず、汚れず、萎まざる嗣業を継がしめ給えり」（ペテロ前1・3〜4）

主の御復活の栄光の御姿を思い浮かべるとき、私の心はおどります。主は初穂としてよみがえってくださった。それは贖罪の愛の勝利であり、罪と死を葬り去って、我らをその奴隷たりしさまから解き放ち、凱旋してくださった証しなのです。我らは、もはや罪も死も恐れることなし！ 主の勝利はわが勝利である。我らはみな主の復活体、栄光体へと化せられる。このことは春の到来の確実なる以上に確実なことなのです。

喜び、喜べ！ 主は勝利し給えり。その勝利を我らに賜れり。ハレルヤ！

「汝らは……神の力に護られてあるなり。この故に汝ら今暫しの程、さまざまの試煉によりて憂えざるを得ずとも、なお大いに喜べり。汝らの信仰の験は、くつる金の火にためさるるよりも貴くして、イエス・キリストの現れ給うとき、誉れと光栄と尊貴とを得べきなり。汝ら、イエスを見しことなけれども、之を愛し、今見ざれども、之を信じて、言いがたく、かつ光栄ある喜びをもて



喜ぶ。これ信仰の極、すなわち靈魂の救いを受くるによる。」(ペテロ前1・5
9)

昨年(1980年)は私達の集會に、森満夫兄、徳廣敦子、清瀬泉、久代妙子の3姉妹の4名を加えていただきました。そして、昨年暮から今年にかけて、藩慎一郎、竹内薫、木原伸夫、河野俊行(いずれもエマ会から)、前田達明の5兄弟と、橋本伸子姉の6名を主は新たに加えていただきました。

主は全的に、その御懷の中へと投げかけ、投身してゆく魂を必ず護り給います。私はこれらの新しい方々のことを主様に祈っています。また、地方在住の皆様のことにも集會ごとにみんなで祈り、とりなしております。どうか、互いにおぼえあい、祈り合つてゆけますように。みたまにある祈りの中に一つであることができますように。アーメン。

(証言) 以下の文章は昨年のエマ会の文集に掲載されたものです〔編者註：文章は割愛し、執筆者名のみを録す〕。法学部3回生 清瀬泉。

(消息蘭)

○2月のある日、信州の小山文夫兄、学校の先生方の京都旅行の機会に一夜、奥田宅を訪ねられ、短い時間でしたが、共に語り共に祈ることができました。

○佐佐保の土屋文昭兄、2月28日(土)夜に來宅、翌3月1日(日)の集會を二年ぶりで兄弟姉妹とともにすることができ感謝でありました。

○南里一博兄・橋本伸子姉、このたび聖名にありてご婚約、挙式は10月の予定です。ハレルヤ！

○河野俊行兄、1月25日(日)より來會。前田達明兄、2月15日(日)より來會。両兄の健康のために御加禱をお願い致します。

○梶原由子姉、足の関節の手術のため枚方市市民病院に入院、3月10日手術の予定。どうか、姉のため、また御家族のため祈ってください。

○錦織成史兄よりお手紙(1981・2・26ハンプルクにて)〔割愛〕。

○住所変更、森下一男・智恵子、香川県木田郡三木町……。

【京都キリスト召団集會のあゆみ】(記録) 1981年1～3月

1月25日(日)「信仰の戦士たち(その1)エリヤ・列王上」(ヘブル書第9回)

2月1日(日)「信仰の戦士たち(その2)エリヤ・列王下」(ヘブル書第10回)

2月8日(日)「信仰の旅路」(ヘブル書第11回、第12章)

2月15日(日)「陣営より出でし」(ヘブル書第12回、第13章)

2月22日(日)「永遠なるキリスト」(ヘブル書第13回、総集編)

3月1日(日)「生ける望」(ペテロ前書1章)

3月8日(日)「活ける石」(ペテロ前書2章1～10節)



京都キリスト召団だより

No. 10 1981年5月・6月号

地方在住の主にある兄弟姉妹方へ

1981年4月27日

奥田昌道

陽光輝く春、新緑のまばゆい初夏の候となつてまいりました。皆様、復活節（4月19日）を御恩寵の中にお迎えになさったことと存じます。今日は、京都の近況をお知らせすることにいたします。

3月29日（日）午前の集会のあと午後は感話会を開き、夕方まで素晴らしい一日となりました。横浜から栗津冬峰さんが来会、感話会でこの一年の歩み、回心の様子などを語っていただきました。姉は私の姪に当たりますが、昨年5月京都に私を訪ねたさいに、それまで三年間とれなかった背骨の痛みをキリストの聖手によっていやされ、継いで11月に内面における回心を経て、別人のような新しい人へと再生した事実をユーモアをまじえて楽しく語ってくれ、一同聖名をたたえました。この4月から、ある専修学校（二年課程）に入学、学ぶべき課題も与えられました。そのお母さん栗津充子姉〔註：奥田先生の妹〕は昨夏の修善寺の特別集会に来会、今、その御家族に豊かなキリストの御恵みがふり注がれています。京都召団の新しい地方会員として、どうか、皆様の祈りにおぼえてください。この3月29日の集会には、奈良召団の弘野慶次郎・淑子御夫妻が来てくださり、感話会には偶然にも岡山の妹尾英子さん御一家も来会、楽しい会となりました。

4月11日（土）・12日（日）瀬戸内召団開設特別集会。京都からは南里兄、森下兄の御一家、それに奥田幸子姉が参加。春の花咲く無口島にて海の香りに包まれながらの白熱の集会。小池先生は3月21日から4月2日までのイスラエルの旅を終えられて、一段と次元的飛躍をとげられ、火の如きご講筵、テープで聴いた私にも、その迫力がひしひしと伝わり迫って参りました。瀬戸内召団の前途に幸いあれ！

4月19日（日）は終日、復活節集会。この日を期して、日曜日の朝の若王子山での（早天）祈禱を復活いたしました。近くの若い諸兄姉と。この復活節集会に一年ぶりでしたが、福田恒子姉（京大法4回生、エマ会）が来会、主様のあつき愛のみたまの御執成しに、はつきりと主のものとせられ、以来、水曜日、日曜日と祈りを共にすることになりました。主の御業の素晴らしさを讃えます。京都の召団の中に、みたまの主があつき御愛をもって、力強く働いてくださることを感じております。

このように京都は今、若い人々が多くなり、活気があふれています。若王子山の祈り、マラソン、集会後、鴨川のほとりでのキャッチボール、バドミントンなど、そのうちには



かの召団の方々とスポーツ大会をやりたいものです。

5月30日(土)・31日(日)は京都春期特別集会です(詳細は別紙)。この集会のためにも祈ってください。

(消息蘭)

○4月17日(金) ハンブルクから錦織兄が主の受難日にあたり、ご挨拶の電話をくださいました。あと5か月で兄を日本に迎えます。その日を楽しみにしています。

○梶原由子姉、3月11日に足の関節の手術を受けられ、その後、順調とのこと。御退院はまだですが、祈ってください。

○メキシコの玉川ウメノ姉がお悪いようです。日本の地よりあつき祈りを送りたいと思います。玉川満兄のためにも御加禱をお願いします。

○塚本伊平兄、大分地裁・家裁へご転勤。小山文夫・正子さん御一家、住所変更。長野県上水内郡信州新町……。

【京都キリスト召団集会のあゆみ】(講筵主題) 1981年3〜4月

3月15日(日) 「神の僕の相」(ペテロ前書2章)

3月22日(日) 「愛の相」(ペテロ前書3章)

3月29日(日) 「主の護り」(ペテロ前書4章)

4月5日(日) 「祈り」(ペテロ前書5章)

4月12日(日) 「過越の羔」(ヨハネ12〜13章、出エジプト12章)

4月19日(日) 「墓を蹴破りて」(ペテロ前書2章)

4月26日(日) 「霊の体」(コリント前書15章)



京都キリスト召団だより

No. 11 1981年7月・8月号

主にある各地の兄弟姉妹方へ

1981年8月2日

奥田昌道

炎暑の日々の中、お元氣でお過ごしでしょうか。

召団だより第10号を4月27日付で出したあと、早、三か月を経てしまいました。その間、5月30日(土)・31日(日)は、京都大学でのエマオ会主催講演会、大和屋旅館での春期福音特別集会と、京都の兄弟姉妹たちの熱き祈りと一致協力のもとに、無事に終えることができました。今回は、小池先生の御講演主題は「新宗教改革」が中心で、ヨーロッパの宗教改革者たちの歴史をたどりつつ、我らの使命を新たに指し示してくださいました。何といっても、みたまのキリスト者たること。それには十字架を深く身に体し、キリストのへと祈り込むこと。

「我主とともに十字架せられたり。最早我生くるにあらず、みたまのキリスト、

わが中に生き給うなり」

のガラテヤ書2・20の告白が、わが告白となるように、その実証者になるように、祈りを深めよとされしました(詳しい内容は又の機会といたします)。

この夏は、私自身とても忙しいので京都の兄弟姉妹たちで「召団だより」を計画してくれました。おかげで、楽しい内容となりました。ご愛読ください。6月14日(日)、京都から4名、奈良の弘野さんのお宅へうかがいました。素晴らしい祈会となりました由、承り聖名を讃えます。

そのあと、弘野慶次郎兄より次のようなお便りをいただきました。ハレルヤ！

「6月14日の日曜日には雨の中、奥田先生の奥様はじめ、森兄、徳廣姉、福田姉がわざわざおこしくださり、忘れ難い集会となりましたこと心よりうれしく神に感謝又讃美する思いでいっぱいです。何という深い神の御思いでありましょう。あれは神のそなえ給うた祈りでした。神から出た祈りだったからこそ、あんなにも豊かに霊とまことで祈ることができたのです。山崎節子さんの病の癒えること、又、神の平安のうちに日々送れるようにとどうぞおぼえて祈つてあげてください。もしも、もしも、京都の集会の方の中で落胆しておられる方がおられたら、私はその方にメッセージを送ります。神は希望です！ 無限の希望です。」(56・6・17)



「久代妙子姉ご結婚、夫君と共にタンザニヤへ！」

奥田昌道

我らの愛する久代妙子姉は7月19日（日）、郷里の広島にて井上邦夫氏と結婚式を挙げられ新生活へとスタートされました。夫君は妙子さんの広島大学時代の先輩（妙子さんが文学部1年のとき、夫君は法学部4年生で、ESSはいっ緒だったとか）で、国際関係論を学び、カナダへも留学、広大の大学院修士課程を経て、国際協力事業団に勤務、このたびタンザニアのキリマンジャロの開発プロジェクトに日本から参加・協力のため、派遣されることになったのです。その出発を前にして、ご結婚のお話はまさに電撃的にまとまり、7月19日には挙式、29日にはロンドン経由でタンザニアへと旅立たれました。3〜4年、現地に滞在の予定とか。7月19日のご披露宴には、私が京都キリスト召団の皆様の熱い祈りをたずさえて列席し、祝辞を述べました。

「姉は昨年4月から京大文学部の聴講生として京都へ来られ、同時にエマ才会に出席、昨夏は修善寺の夏期特別集会にも参加、京都キリスト召団の会員として一年余をともし祈り過ぎてきた方です。みたまのキリストの御愛により素晴らしく変貌され、明るい笑顔と静かなお人柄により、みなさんから愛され、親しまれてこられました。だから、短い期間だったけれど、京都は妙子姉にとって第二の故郷、魂のふるさとだと信じます。あわただしいご出発で送別会もできませんでしたが、ここにはなむけの言葉を送ります。

それは妙子さんも特愛召団讃美歌15（小池辰雄先生作詞A10）

1. 「汝れ我が衷にうち
 2. み父のわれを
汝を愛す
 3. キリストのため
友を愛せん
 4. 「汝れは愛なり
みたま
聖霊の愛を
- しかと宿りて
さらば成るべし。
愛することく
わが愛に居れ」
生命を賭けて
み霊は助く
愛の炎ぞ！
貫き生きよ」

であります。世界のどこへ行つても、人と人とを結ぶものは心であり、愛です。

日本と世界を結ぶ架け橋となつてください。」

と語り、右の召団讃美歌15を全曲、独唱した。ある感動が披露宴を包んだ。これからお二人のことをずっと祈りつづけて行きます。どうか、お元気で！



「京都召団朝の祈り」

森 満夫

京都キリスト召団会場から比叡山をはじめ東山の山なみが見渡せる。東山三六峰のうち、集会場のちょうど真東の山が若王子山で、わが京都召団の朝の祈り場だ。哲学の道の南始点にある若王子神社前に、毎日曜朝7時半に集合する。奥田先生は両手にそれぞれ聖書と讃美歌を持ち、自宅からここまで約2.3キロの道をいつも走って来られる。一方、私たちは眠気まなこをこすりつつ、自転車で、あるいは歩いてかけつける。

こうして、3人、4人と集ったところで山を登る。山の中腹に新島襄先生の墓があり、ここで一礼、ここから本道をはなれ、われらが祈り場へ向かう。山のふもとから約600メートル位あろうか。途中かん木がおい繁っているところをくぐり抜け、クモの巣を払い祈り場へ到着する。なぜか、露払い及びクモの巣払いは奥田先生の役目で、付近の林の中に隠し置く枯れ木（自称如意棒）を使って巧みに道を切り開かれる。日曜の朝は、クモにとっては大受難の日ですな。

樹木に囲まれた静かな祈り場で讃美歌をうたい、御言を聞き、祈る。近くで小鳥たちが私たちの祈りに合わせ、さかんにさえずる。朝のすがすがしい空気を胸に吸いこみ、「主様」と叫ぶとき、身のひきしまる思いがする。

約30分程祈って、山を駆け下りる。そして奥田先生はまたも走って自宅まで帰られる。そのスプリンター振りは目を見張るほどで、京都キリスト召団の「青年」の名にふさわしい。朝の祈りは小雨決行で、槍が降ってもやるそうなの。

朝の祈りに参加！ 走り、汗をぬぐうと体がしゃんとし気分がいい。思えば私は、昨年までは京都キリスト召団なるものを知らず、日曜日はひたすら眠りこけていたのだ。奥田先生は言われた。「新しき我、そこへ至る道は祈りであり、毎週の集会である」と。かくして私は日曜の朝、睡魔を振り切り若王子山へ向かうのであります。ハイ。

「感謝・奈良キリスト召団に導かれて」徳廣敦子（割愛）。

「エマオ会の近況報告」清瀬泉（割愛）。

「エマオ会主催の宗教講演会の報告」河野（割愛）。

「5月10日藤井孝・のぞみ兄妹の家庭集会の報告」木原（割愛）。

（消息蘭）

○メキシコの玉川ウメノ姉、1980年春、メキシコに帰られ、一時、御健康がすぐれませんでした。今は大変お元気になりました由。本当に感謝です。姉は今も京都集会の録音テープを喜んで聴いていてくださいます。姉が主に護られて輝いて生きてくださいますよう、京都からお祈り申し上げます。



○玉川満兄もずっと京都の集会で祈りを共にしてくださっています。主は祈りを聴き給う！ ハレルヤ！

○奥村和子姉、今年の春から安静療養中でいらつしやいましたが、大分、回復されました。すつかりお元気になれますよう、どうか御祈りください。

○梶原由子姉、手術なさった足も漸次回復し、歩行可能となりました。ただただ、主に一切委任の梶原姉、神を愛する者のためにはすべてが働いて益となる。どうか御一家の上に主が最善を成し給わんことを！

○金山直樹兄（京大大学院法学研究科博士課程）、エマオ会に来ておられましたが、6月7日より京都召団に参加。兄の明るいお顔と笑い声に、京都は一段と活気づいて居ります。

【京都キリスト召団集会のあゆみ】（講筵主題） 1981年5～7月

5月3日（日）「ペンテコステに向かつて」（使徒行伝1章）

5月10日（日）藤井兄弟宅にて祈祷会

5月17日（日）「我に有るものを汝に与う」（使徒行伝3～4章）

5月24日（日）「にないの愛」（コリント前書9章）

5月30日（土）講演会、京大において

「わが中なるキリスト」奥田昌道

「新宗教改革」小池辰雄先生

5月30日（土）～31日（日）特別集会、大和屋旅館

「キリストの僕婢」（イザヤ書42章）

「聖霊の証者」（ヨハネ伝14～16章）

6月7日（日）「約束の御霊」（使徒行伝2章）

6月14日（日）弘野兄弟宅にて祈祷会

6月21日（日）「生命の御霊の法」（ロマ書8章）

6月28日（日）「聖霊の愛」（ロマ書8章）

7月5日（日）「我信ず、信なき我を助け給え」（マルコ伝9章24節）

7月12日（日）「祈りの家」（イザヤ書56～58章）

7月19日（日）「エホバわが義」（イザヤ書59章）

7月26日（日）「わが義・わが救」（第二イザヤより）



京都キリスト召団だより

No. 12 1981年9月・10月号

1981年8月「第28回夏期福音特別集会」（於静岡県梅ヶ島）特集号

1981年9月26日

奥田昌道

今回は、今夏の特別集會に京都から参加した方々の感謝の文集となりました。参加できなかった兄弟姉妹の方々、この文集により、主キリストのあつき御愛を汲みとっていただければさいわいです。御講筵と祈りをもつて全集會を導かれた小池辰雄先生、集會の運営に献身的な愛勞をつくされた東京キリスト召団の方々にこの機会に改めて感謝の意を表します。

全集會の標語は、

「我は実存主、始なり終なり、汝らは我が証人なり」
アルバ オメガ

「汝らの呼ばざる前に我れ応え、語り終えざる先に我聞かん」（イザヤ書65章24節）

「汝の上に臨みたるわが靈、汝の口におきたる我が言、永遠なり」（イザヤ書59章21節）

で、講筵は第三イザヤ書（イザヤ書56章〜66章）の中から選んで話されました。第一回（8月21日夕）は、

「我は独りにて酒槽を踏めり」（イザヤ63・3）
さかがね

審判なくして救済なく、義がなくして愛はなし。神の聖意を全的に受けとれない、従いきれない不信・不義なる我らを神は裁きつつ救いたもう。しかも、義人キリストは、その裁きを自らの身に引き受けて、我らに義を与え給う。義を与える、これが愛。愛は贖罪愛であつた。

ぶどうは生命をあらわす。ぶどうの真紅の汁は血（生命）に通ずる。独り酒槽を踏むキリストの衣は真赤に染まつている。裁きの血であるとともに、生命を与える血である。審判の義がキリストの十字架において贖罪の愛、生命を与える愛へと転化している義と愛の深いかかわりを語られた。

「われはエホバ（実存主）のわれらに施したまえるもろもろの恵みとその誉とをかたりつげ、又、その憐憫にしたがい、その多くの恩恵にしたがいてイスラエル之家にほどこしたまいたる大いなる恩寵を語り告げん。エホバ云い給えり。『誠にかれらはわが民なり、いつわりをせざる子らなり』と。かくてエホバは彼らのために救主となりたまえり。彼らの艱難のときは、エホバもな

ほまれ
めぐみ
いづくしみ
すくいぬし
なやみ



やみ給いて、その面前みまえの使をもて彼らを救い、その愛とその憐憫とによりて彼らをあがない、彼らをもたげ、昔時いにしえの日、つねに彼らを抱きたまえり」

(63・719)

このエホバの心を心として、それを地でゆかれたのがイエス・キリストでした。この聖句は何と慰め深い愛そのものでしょう。愛する者のなやめるとき、いためるとき、自らもそれをわがなやみとし、わがいたみとして、共になやみ、いたむ。しかし、その中にあつて、みたまのとりなしの祈りの力によって必ず勝つ。愛する者を救い上げる、引き上げる、天の高みへと。

とりなしの祈りの中で、自分自身を十字架・復活・聖霊のキリストの中へぶち込み、その中でキリストの絶大なるみ力に全托すれば、その祈りは必ず聴かれます。これを私(奥田)は何度も経験してきました。主にある兄弟姉妹たちよ、右のイザヤ書の聖句をわれに賜りたる恵みの言として、しかと受けとり、互いにとりなしの祈りをいたしましょう！

再び講筵に立ち戻つて、「いつわりをせざる子ら」、「いつわりなし」とは、あるがままの自分をそのままかくさず、かざらず、キリストに投げ出す。そういうこと。それを「全的」と言う。全的な相の魂を主はよろこびたもう。

第二回集会(8月22日午前)は、「**歓喜よろこびの油**」(イザヤ書61章1〜3節、61章10〜62章2節)、イザヤ書の基調の一つである「遺れる民」としての自覚をもつて信義一貫の生き方をしようとして語り出でられた。午後は感話会(第三回集会)、第四回集会(夜)は祈祷会で、「天を裂きて降り給え」(64章1節)。旧約の預言者群像、アモス(義)、ホセア(愛)、エレミヤ(心)、第一イザヤ(信)、第二イザヤ(贖罪)、第三イザヤ(霊)。これらの特色はすべてナザレのイエスの中に流れ入っている。あたかも山々の水を集めるガラヤ湖のように。そして、新約の使徒達へと受けつがれ流れ出ている。実に「キリストは宇宙をいだくみたまかな」(小池先生の句)である。スケールの大きい魂となってください。最終回第五回集会(8月23日午前)は「**新天新地**」イザヤ書65章17〜25節を中心にヨハネ黙示録における新天新地の啓示に及ぶ壮大な神のドラマが展開された。

(以上、特別集会の一端を記しました。次頁からは兄弟姉妹の文集です。奥田昌道)

〔編者註：兄弟姉妹の文集は割愛。執筆者氏名は次のとおり。梶原由子、広瀬末子、藤井孝、木原伸夫、金山直樹、清瀬泉、光野清、光野美弥子、南里一博、橋本伸子、福田恒子、弘野俊行、徳廣敦子、広瀬光生、森満夫、村岡泰行〕

今回は全国各地からの参加者総勢170名。京都キリスト召団からは、中学生以上で30名で参加。遠くは宮崎の村岡兄、香川の森下兄ご一家。横浜の粟津姉のご一家が今回はじめて参加。また、新しい兄弟姉では、金山、木原、河野、藩の諸兄、橋本、福田の諸姉が参加でき、楽しい集会となりました。集会が終つて、静岡駅に辿りついたあと、21名で近くの趣あるスパゲッティの専門のお店にて(河野兄の発掘になる)、楽しい団らんのひととき、忘れがた



い思い出です。

来夏8月20日(金)～22日(日)、再び梅ヶ島にての特別集会が予定されています。今年参加できなかった兄弟姉妹の方々、来年はぜひ一緒にに行けますように。(奥田)

(消息・案内蘭)

○二年間、互いに祈り合ってきました錦織成史兄、ハンプブルクでの二年間の研究生生活を終え、9月26日(土)空路にして帰りがけ、27日(日)の集会には元気なお姿を見せてくださいます。一同再会のよろこびに満たされております。万才! ハレルヤ!

○7月5日(日)から清水正一兄が集会に列席され、ついで奥様も加わられ、日曜日ごとの集会で祈りを共にすることとなりました。御家庭の問題で私に助言を求められたことがきっかけでしたが、「直ちに」の御言のとおり、翌日から早速に祈りの群れの中に飛び込んでこられ、

「人にはできないことも、神にはできる。神にはなし能わぬことなし」

との主の約束を主は事実を以て示してくださいました。このたび短文をお寄せくださいましたので左にご紹介いたします。(奥田)

「京都キリスト召団」との出会い

清水正一

順調に生活していた家族が、今年5月長男の結婚時期と前後して、次男の勤務意欲と矢継ぎ早やに長男の結婚生活についての難問が突如として発生し、瞬時にして闇黒の谷間に小羊達が迷い込んだ状況に陥り、思案の末7月4日京大法律相談に伺い、人生の進路について奥田先生にお教え頂いた事が、あたかも主イエスの救いとして、有難い御光が進むべき道をお示しくくださった様にベストの結果が得られ、今更ながら、わが主キリストさまに感謝と信ずる事の尊さを痛感させて頂き、拙文のペンをとった次第です。

○南里一博兄・橋本伸子姉結婚式、1981年10月18日(日)午前10時30分、於京大会館。司式、奥田。司会、錦織により、京都キリスト召団聖歌隊の合唱のもと、集会員全員の参加のもとに主キリストの聖名にありての結婚式を行います。ご加祷をお願い申しあげます。二人の前途に祝福あれ!

○井上邦夫・妙子(旧姓久代)夫妻は7月27日に日本を発たれ、ロンドンで数日ののち、8月4日無事タンザニア、キリマンジャロの「モシ」の町に着き、新しい生活に入られました。「花も緑も多く、しつとりとした雰囲気の良い街です。雪をいただいたキリマンジャロ山を一日中仰いでおります」とのお便りがありました。連絡は左のとおり(邦夫氏の勤務先です)。

○祈祷会の曜日の変更——(水)から(木)へ変更——9月24日(木)より、祈祷会は毎週木曜日の晚7時15分～9時30分といたします。



京都キリスト召団だより

No. 13 1981年11月・12月号

「1981年11月22日(日)・23日(祝) 京都福音特別集会」特集号

1981年12月13日

奥田昌道

晩秋の京都、御所の紅葉、銀杏の黄色の鮮やかな大自然に包まれながら、11月22日(日)・23日(祝日、勤労感謝の日)の連休日、大和屋旅館での集会、御所での早天祈祷会、そして最後は「くに荘」を会場としての感話会に至るまで、二日間を充実した特別集会のうちに過ぎしました。東は栃木、東京、埼玉、裾野の各召団の兄弟たち、西では鹿児島、香川、大阪、奈良、名古屋、岡山からの兄弟を迎えて、90名ばかりが参集、祈りの熱い集会となりました。今回の主題は「預言者エレミヤ」。

小池辰雄先生は、全52章からなる旧約聖書エレミヤ記を「人間エレミヤ」(第一回集会)、「預言者エレミヤ」(第二回集会)、「新契約」(第三回集会)と三部に分けて、その特色、要点を見事に開示し、展開してくださった。第一回の「人間エレミヤ」から実に素晴らしい内容の心魂を揺さぶる感動的なご講筵だった。先生の香壇の正面左右に、

「汝我を勧告し給いたれば我其の勧告に服しぬ。汝我を捉えて我に勝ち給えり。」

——エレミヤ20章7節——

天韻

「我れ我が法を汝らの衷に据え、汝らの不義を赦し、その罪をまた思わず。」

——エレミヤによる新契約——エレミヤ書31章33、34節

天晨

と力強く墨書された垂れ幕が下がっている。

「エホバの神様につかまえられ、ねじ伏せられ、万国の預言者として立たしめられたエレミヤ、生来、情感の豊かな、深いハートの持主であるエレミヤが、神にとらえられたばかりに、民の罪をおのが罪として自覚し、さんたんたる姿の同胞、不信不義の極みなるイスラエル民族の現状に憤り、悲しみ、涙し、それでも彼らをまことの姿へと帰したまえ、貴神^{あなた}が彼らを(我らを)ひき返したまえと、激しく神に祈り迫るエレミヤのひたむきなすがたに打たれる思いであった。エレミヤは「いつわり」が大嫌いだった。いつわりとは何か。欺くことだ。人を欺くことだ。人を欺くことは、その意味で罪だが、実は自己を欺き飾るのがもっと悪い。自分を飾るのが一番悪い。あるがままで神様にぶつかる。あるがままの自分をキリストに投げ出す。これがいつわりなき姿だ。こう小池先生は語られた。エレミヤのあり方は「あるがまま」であり、飾らないということ。これがエレミヤの「いつわり」なき姿であった。エレミヤの言に「帰れ」(シューブ)という言葉がさかんに出てくる。「向き直る」ということ、エホバの神様に「向き直る」ということ、南



無すること、我々ならキリストの中へ帰り行くこと、祈り入ること、帰入すること。エレミヤは童心の極致だった。あるがままをぶちまけている。「自分の生まれて来た日は呪われよ」と嘆き、「神様、どうして私を欺かれるですか」と抗議している。このようなすがたが誠のすがただ。自分を神様にぶちまける。我々にとつてはキリストの十字架が立っている。そこにキリストの砕けがさし出されている。この「砕け」この「あがない」をやるぞと、キリストはさし出していただく。キリストにおける砕けの相が人間にとつてのまことだ。全存在で参りました（降参しました）ということだ。キリストの十字架に来るしかしょうがない。そこに俄然、聖霊が臨む。み霊、み言が火と燃ゆる。青年はこの福音に触れたら本当の勇者となれよ、原始力（Urkraft）なのだから。この力をキリストは与えたくてしょうがないのだ。」

人間エレミヤの相を小池先生は次のようにしめくくられた。

「同胞を我と思うエレミヤ、それ故の怒り、悲しみ、涙、これが人間エレミヤ。民族即我、民族がまた妻。彼は預言者中でもいちばん人らしき人だった。神と取っ組み、打ち伏せられて預言者となつた。打ち伏せられないと、本当の預言者となれない。心の預言者エレミヤ、この心は情熱をもった心だ。神の愛を本当に受けとるのは、そういう心の人だ。北イスラエルは既に滅び、南ユダはまさに夕暮れ時を迎えている。このユダと運命を共にせんとす。涙なきを得んや。しかし、熱涙である。炎の如く燃える。世の末までも、このエレミヤの涙の告白は消えない。エレミヤの全存在は深い涙の祈りである。呻きも叫びも怒りも嘆きも、みな神様に対する祈りだった、これをどうにかしてくださいとの。これを受けとつたのがキリストだった。キリストはエレミヤの心を心とし、エレミヤの祈りを受けとられた。」（以上、第一回の要約）

京都特別集会のご講筵要旨は「エン・クリスト」第8号（1982年2月刊）に小池先生のご執筆で掲載されます。今回の「京都召団だより」では、以下に兄弟姉妹の感想文を掲げ、感謝の意を表します。（奥田昌道）

「我は彼らの神となり、彼らは我が民となるべしとエホバ言いたもう」 奥田幸子

「汝、我を捉えて我に勝ち給えり」。神にねじ伏せられ、火の如きことばを語らざるを得なかったエレミヤ。「背ける子らよ、我に帰れ。我、汝のそむきをいやさん」。背神のイスラエルに語り給うエホバ。限りなき愛に応えることを知らない御自分の民に、なおも神の追求は続くのです。「わたしはお前を別の器にする」と。審判と恩寵のドラマの秋の特別集会、導いてくださった小池先生に感謝申し上げます。

何もできない者、ただあなただけです！と言つてる者をキリストはつかまえて用い給う。



ただ聖名の故に、汝の名のためにこの存在はありました。自分はこなごなにされて、日々新たにキリストの相の成らんことを！

「我は汝がもの、汝は我がものなり」と熱愛のキリストに護られ、導かれてきましたこの十年を思い、感謝のほかございません。また、京都の集会に遠くより参加してくださった兄弟姉妹に心から感謝申し上げます。聖名を讃えつつ。

「エレミヤを思い起こせ」

森 満夫

私は二年前、エレミヤ記を読み、次のような書き込みをしている。

「父母も信頼できず、結婚もできず、家庭も持てなかったエレミヤ、神様はエレミヤに何とつらくあつたのであろう。エレミヤは、もつともつと恵まれるべき生き活を送ってしかるべき人なのに……。」

と。これは、当時の私の素朴な疑問であつた。今回の特別集会で、エレミヤのなげき、悲しみを更に深く知らされた。エレミヤは、時に激しく神様にあつたりしたが、ユダヤの民に対しとりなしの祈りをし、あくことなくエホバに帰れと叫び続けた。全身全霊をもって最近読んだロマン罗兰の言葉、

「イエス、使徒たち、偉大な問題あるいは自由思想の先駆者であつた古代または中世の人々は落胆し、放棄する口実を私たちよりも千倍も有したにちがいありません。しかも彼らはそれをしなかつたのです。ほとんど常に彼ら自身が粉碎され、彼らの思想はずつと（ときには幾世紀も）後に征服に成功したにすぎません。」

苦しい時、つらい時には、かのエレミヤを、ヨブを、そして他ならぬイエスを思い起こそう。集会での早天祈祷、黄色い銀杏のじゅうたんの上でエレミヤのことを思いうかべ手を合わせていると、不思議に勇気が出て、声をあげて祈ることができた。とても、うれしい。

「私の泉」——9月27日の集会に出席して——

栗津冬峰

私は京都召団の地方会員です。京都での集会に出席するのは、3月以来半年ぶりのことでした。いつも召団のテープを送っていたいて、日曜日は両親とは別に自分の部屋で礼拝をしている私にとって生番組というのは本当に素晴らしいものだと思います。一人でいつも祈っている時とは全然ちがうものが感じさせられます。一人で祈るよりは二人、二人で祈るよりは三人の方がよいというように、本当に召団の兄弟姉妹と共に祈るということとはとても大切なことだと思いました。

その日は、召団のみなさんが待ちにまつていた錦織兄がご出席なさって、おじさま（奥田先生は私の伯父様であります）も朝からうきうきしておられたようです。私も「うわさの錦織兄」にお目にかかれてとてもうれしかったです。

最初のお祈りの後、錦織兄は詩篇を読まれました。その時は、正直に言つてびっくりし



ました。「すばらしい！」この一言以外何がありました。本当に全身全霊でもって読んでいらつしやいました。「目」で読むのではなく、「魂」で読んでいらつしやいました。本当にあの時の錦織兄のような聖書の読み方が、私にもできたらなあとも今でも思います。

最初に召団に出席した3月29日より、今回の集会の方が感動しました。もう主様の話を聞いているだけで涙がとまらなくて、最後の讃美歌は泣いてしまつて歌えませんでした。私は、京都召団は「生きながらにして天国にいる気持ちになれる所」だと思っています。実に兄弟姉妹それぞれ個性の強い人が多いのに、魂だけは一致団結しているのです。つねに主様にあつて一つなのです。私は集會が終わると横浜に帰り自分の現実にもどります。学校という場で異なつた魂の人ともまれて、疲れ果ててしまつた時、よく召団の人たちのことを思い出します。召団のみなさんが私のことを祈つてくださっていることを思うと、私はうれしくてありがたくて涙が出ます。

本当に感謝です。いつも私にあふれんばかりの「光の水」を与えてくださいます。主様が導いてくださった京都召団は私の大切な泉です。

これからも主様の大きな恵みと愛に感謝し、たえず祈つていきたいと思っています。

〔編者註…以下の感想文は割愛、筆者氏名のみを録す。松井康男、南里一博、清瀬泉、梶原由子、廣瀬末子、森満夫、光野美弥子、光野清、福田恒子、中田かほる、小野はつ、徳廣敦子、金山直樹、井上剛志、清水正子、藩慎一郎、田中英樹、南里伸子、河野俊行、大野〕

【京都キリスト召団集會のあゆみ】（講筵主題）1981年8月以降

8月16日（日）「わが喜び、わが光」（イザヤ書60章）

8月21日（金）23日（日）夏期福音特別集會（召団だより第12号参照）

9月6日（日）「恩恵一切」（エペソ書より）

9月13日（日）「わが生くるはキリスト」（ピリピ書第1章）

9月20日（日）「十字架の死に至るまで」（ピリピ書第2章）

9月27日（日）「キリスト我を捉え給えり」（ピリピ書第3章）

10月4日（日）「一切の秘訣」（ピリピ書第4章）

10月18日（日）南里兄・橋本姉結婚式（京大会館）

11月1日（日）「エレミヤの召命」（エレミヤ記第1章）

11月8日（日）「生命の水の源」（エレミヤ記第2章）

11月15日（日）「エレミヤの祈り」（秋期特集準備）

11月22日（日）23日（月）秋期特別集會

11月29日（日）秋期特集感謝集會

12月6日（日）「極みなき愛」（ヨハネ伝13章）

12月13日（日）「十字架の愛」（イザヤ書63章、53章）



京都キリスト召団だより

No. 14 1982年夏季号

1982年春期京都特別集会報告

1982年7月11日

奥田昌道

今年の春期特別集会は好天に恵まれ5月22日(土)、23日(日)の両日、京都教育文化センター(第二日)、及び京大会館(第二日)を会場として開催された。詳しくは、「エン・クリスト」第10号(1982年夏季号8月刊)をご覧ください。ここにはそこに書いてなかったことを記しておきます。

今回の特別集会は、小池先生の著作集第三巻『無の神学』の刊行と時を同じくしてもたれた記念すべきものであった。小池先生の半世紀の祈りと思索の結晶たる『無の神学』! その出版の日を先生はどれほど切に待っておられたことか。我々とても、その日の一日も早からんことを祈りつつ待望していた。

5月22日(土)午前9時40分、『無の神学』の入ったダンボール箱10個が京都キリスト召団集会所(奥田宅)に届いた。荷送人は「河出書房」となっている。小池先生のご令息の信雄氏が河出書房にご勤務になっており、印刷・製本など万般、そのご尽力に負うところが大きいと承っている。このたびは、でき上がった最初の200冊のうち、一冊を小池先生に、そして199冊を宅急便にて京都へ直送してくださった次第である。

我々は小池先生のご到着まで荷を開けるのを待った。やがて午後1時半頃に先生ご一行がお着きになった。一足先に届いた『無の神学』の荷に先生は大いに喜ばれた。何としても、特別集會に間に合わせたいと願っておられたからである。ダンボール箱を開いて、一同歓声をあげた。美しい装幀の外箱は黄金色なのである。先生はかつて夏の特別集會(1973年8月、於松崎)において、「キリストの祈り」と題するご講筵の中で、「祈りが深くなると金色の光を発する」と語られた。だから、黄金色は「祈り」の色である。「キリストは祈りの人であった」と小池先生はしばしば語られた。そして、先生自身が「キリストへの祈入」の人である。だから、この黄金色は先生にもっともふさわしい。第三巻にこの色を選ばれた(否、第三巻のために残しておかれた)のもうなづける。

このたびの集會ならびに講演會の前後のひとときの先生は大変だった。『無の神学』を手にして先生にサインをいただきたいと願う者たちが列をなして待っているのである。先生は一人一人のために、一冊一冊に心をこめて言葉を書き、署名をなさっている。小池先生、どうもご苦勞様でした。(サインをいただいた諸兄姉よ! どうか、内容をじっくり読み通してくださいよ、つんどくにならないように!)



各地から京都までお越しくださった兄姉の方々、有難うございました。

〔編者註…以下の来信2通割愛。執筆者、松井康男、大岡典子〕

他にも多くの方々からお手紙、お便りいただきました。心から感謝しています。それぞれのところで元氣でお励みください。

「玉川ウメノ姉を天に送りて」

奥田昌道

我らの愛する玉川ウメノ姉は1982年6月16日夕刻（在メキシコ、現地時間）主のみ許に召されなされた。77歳であった。姉は1979年の11月、治療のためメキシコから日本に帰られ、半年ばかり京大病院に入院され、その間度々、京都キリスト召団の集会に出席された。1980年5月、メキシコに帰られてからのしばらくは、至極お元氣とのこと、私たちもおよろこびしていたが、今年に入ってから病氣が悪化したようであった。そして、激しい痛みが姉の身体を貫き、姉は十字架の主の御苦しみにあずからせていただいているのだと、聖名を呼び、祈り抜いてこられた。そして、いつもご令息のご健康のことを案じておられた。私のもとに届けられた最後のお手紙は、代筆によるものだった。もはや、ご自分では筆がとれないほどに病狀が悪化していたのだ。6月10日付のお手紙で、ご召天の翌々日に私のところに届いた。「近い中に主はお連れくださる事を信じて待ち望んでおります」と書かれていた。

いつも明るく、祈り深くあられた玉川ウメノさん、あの笑顔が、あの声がいまも懐かしく想いおこされます。

痛みと戦いつつ、雄々しく耐え、勝ち抜いて、今は主の御ふところに安らげく憩っておられることでしょう。

メキシコの地で邦人のための伝道に、今は天界のご夫君と共々よく働き、よく尽くしてこられた姉の祈りが必ずや彼の地で実を結びますように。

《玉川ウメノ姉のお手紙から》 1982年4月23日付 廣瀬末子姉宛

貴き聖名を崇め奉ります。

3月24日、美しい桜の絵ハガキを頂き、テープをお送りくださったお知らせで嬉しく一生懸命、無事に着きますようお祈りと共にお待ちして居りましたところ、4月13日、無事に二本落手致しました。皆様の厚き祈りと主様の御名の故にこの小さな者の為にかくまでお心におかけくださいますことを心より感謝致して居ります。

早速1月10日のテープを拝聴し始め、司会者（藤井様）及び奥田先生の靈に満たされた御説教及び皆様の新年の御決意を心より承り、小さいながら私もかくありたく祈る者でございます。いよいよ京都のお集まり大いなる御祝福の中にあり、満席とのことで、聖名を崇



めて居ります。ハレルヤ。

申し訳ございませんが一寸、私の近況を書かせて頂きます。1月中旬より腰が痛いので、ドクトルに申しましたところ、風邪のせいでしょうとの事。2月中旬よりその痛みはすくく、レントゲンの結果は脊椎骨〔に〕ガスが入り（老人病）大小不同になった為との事で、すぐカルシウム治療との事で、5回ばかり致しましたところ、結果はますます痛く、食事も取れず、動く事もできませんので、すぐ近くのドクトルで痛み止めと点滴をやつて、少し落ち着いてきましたが、受難週に入り、痛みの範囲が広くなり、主の御受難を身を以て小さいながら味わう事ができました。9日は受難日、10日は私の誕生日で、それまでは……と早く主よお連れくださいと切に切に祈り続けましたが、10日の誕生日にもう一度、申命記30・19を与えられ、主よ、この苦しみに堪え得る力を与え給えと祈り続けて居ります。医薬ではどうにもならない今の状態で、時々点滴をやつて、ただ主様のお癒しを祈り居ります。

4月18日は、おくればせながら復活節礼拝を我が家でさせて頂き、午後は、七十七歳の（喜寿の祝）お祝いとして頂き多くの親しい方々が来てくださり、賑やかな幸いの時を与えられました。

何時まで地上において頂きますか？ 最後の最後まで頑張らなくては……主様におすがりして祈りの毎日を過ごさせて頂いて居ります。

廣瀬奥様、地上の幸いなお交わり、まことに有難うございました。奥田先生はじめ、奥様及び信者の皆様、まことに有難うございました。

今までお送りくださいましたテープは、少しずつ拝聴させて頂いて居ります。読書も今はあまりできませんが、元氣が出ましたら、また、ゆっくり書かせて頂きます。では、誠に有難うございました。

呉々も先生にもよろしく願います。錦織様もお元氣で御帰国なさり、御集會が賑やかに感謝です。テープ誠に誠に誠に有難うございました。かしこ

4月23日

ウメノ

広瀬奥様へ

〔編者註…申命記30・19「我今日天と地を呼びて証となす 我は生命と死および祝福と呪詛を汝らの前に置けり 汝生命をえらぶべし 然せば汝と汝の子孫生き存らうることを得ん」〕

「5月2日（日）藤井孝・のぞみ御夫妻宅にて聖日集會及び愛餐のひととき―」

奥田昌道

あいにく小雨の降る天候でしたが、この日は、長岡天神（阪急京都線）の藤井ご夫妻宅にて集會。いつも奥田が学会などで留守にするときに藤井兄弟宅で集會をしていただいた。そのときは、きまつて藤井兄の腕をふるつてのご馳走にあずかり、とくに学生諸君、独身者



諸兄姉は、その恩沢に豊かに浴してきた。今年はじめて、私もその恩沢にあずかったのである。この4月に宮崎から大阪へ転勤してこられた村岡兄がご一家でこの集会に見え、一同の喜びは倍加した。藤井兄の司会になる午前の集会のあと、ご夫妻の愛労による昼げは素晴らしいものだ。長岡産の新しい「竹の子」のごちそうだった。一同心から感謝した。どうも有難うございました。

（証言）

梶原由子（割愛）

（消息覧）

○古城秀信兄、1月6日に真智子さんとご結婚。おめでとうございます。

○兵永英臣兄、福田恒子姉、この3月めでたく大学を卒業、就職先は兵永兄はクラレ、福田姉は松下電器産業。

○京都キリスト召団に來会。藤本哲生兄、今年1月より。森藤景子姉、今年6月より。

○京大エマ才会、新学年は4月22日（木）より再開。新しい方々7、8名を加え、15〜20名くらい集まり、お昼休み（毎木曜日）、聖書（福音書を中心に）を読む会をつづけて来た。7月8日（木）をもって一学期終了。新來会者のためにご加禱をお願いします。

○奥村和子姉のご快癒のため祈ってください。

○神庭ご夫妻のためにもお祈りください。

（奥田記）



京都キリスト召団だより

No. 15 1983年新年号

新年を迎えて

1983年1月6日

奥田昌道

1972年1月1日を期して独立への一步を踏み出し、妻幸子と二人で祈り会を始めてから、満十一年が過ぎ、今年は第十二年目を迎えることとなった。今日の京都キリスト召団の姿をみると、それは奇蹟としかいいようがない。この地上に京都キリスト召団という、キリストのみたまの愛で結ばれた祈りの群が存在するということが、このことが何よりも雄弁に主イエス・キリストの実在を証明している。力あるキリストの導きなくしては、どうしてこのような群が存在しえようか。

私が日曜日の集会で聖書を講じるとき、私は素人であり、一信徒にすぎない。ただ私はみたまのキリストに全托する。語るのは肉なる私ではなく、霊なるキリストであると信じ、キリストに祈り入って、内なるキリストを告白する。私自身が驚くような恵みの迫りを体感して、みたまの愛を語る。無限無量のゆるしの、つつみの、荷いの愛なる主キリストの前に、小さき己れ自身はもはや問題ではない。

ヨハネ伝13章〜17章に溢れるキリストの白熱の愛、ローマ書8章の力ある絶対愛、コリント前書13章の愛の讃歌、ヨハネ第一書に充滿する神の愛。この愛がわれらの生命である。われらはこの愛に生きる。

「1982年秋期京都特別集會を終えて」

恒例の京都特別集會は、晩秋11月27日（土）・28日（日）の両日、「御車會館」を会場として開催された。穏やかな小春日和の好天に恵まれ、遠来の兄弟姉妹達を大自然もまた祝福してくれているようであった。この特別集會の講筵内容の要旨は「エン・クリスト」誌第13号（2月号）に小池先生が書いてくださるので、それにゆずる。また、簡単な報告記事を私（奥田）も寄稿したので、それをお読みいただくことにしよう。ここには、右、特別集會對する兄弟姉妹たちの文章や来信を掲載させていただくことにする。

「ある日の祈禱會」

森 満夫（京都）

木曜日の夜の祈禱會において、奥田先生御夫妻をはじめ小人数で、秋の特別集會のテープを聴いた。（集會当日は私は会場の後方に坐していた）。今、こうして、小池先生の直近で収録した声を聴いて、先生が力を込めておられるところ、沸騰しておられるところ、叫んで



おられるところが手にとるように伝わって来、更には、聖書を指で叩く音、息づかい、そして言葉では語りきれない時の沈黙などなど、一度聴いた御講筵とは思えない程、迫力を感じさせられた。小池先生が、「意味ではなく、言のひびきを受けとってください」と言われるが、そういう聴き方が少しできたような気がした。そして、テープを聴き終えて祈る時、私は自分でも驚くほど大きな声が出、体が何かしら熱くなった。

慰め深い御言葉が心の深い部分に触れ、日頃、我慢していたことがこらえきれなくなつて、心の中で熱い涙となつて流れる時、あるいは語られる言葉、祈りのひびきに圧倒され、その人の気持ちひしひしと伝わってくる時など、自分の思いを越えた祈りをさせられることがある。なりふりかまわずとの言葉があるが、まさにそういう状況におかれるからかも知れない。もちろん私の祈りはいつも沸騰しているわけではない。妙にさめていることを自覚することがあるし、御言葉が浮かんでこず、言葉の羅列になつてしまうこともある。こんな祈りは聴かれるはずがないと、自分の祈りを情けなく思うことだつてよくある。自分を見てはいけない、自分がどうのこうの言つていては申し訳ないと思つているものの、どうしても自分を見つめてしまう。

そんなことを考えている私に、小池先生はかく語られた。

「いったい、祈りの上手、下手、人間の整つてゐる、整つていないのが問題なのかね。あるがまま、全的に、キリストの中に己れをぶちまけてごらん。挺身することです」と。また、

「そのことは僕として生きることです。キリストは全部、自分の側を明け渡しておられたじゃないですか。自分が空っぽになつて、汝の聖旨を！と叫んでゐるんです。無者に徹することです。私たちにそのことができないのを、キリストが十字架という事実でやってくださっているんです。皆さん、あるがまま、十字架の門を通つて、キリストの中に祈り入ってください。そこはもう聖書の世界です」と。

「愛なるキリスト様、たとえ私たちが忘れることがあつても、『我キリストはお前たちを忘れることはない』と約束してくださったお方よ、どうか私たちをあなたの暖かい胸の中にしっかりと抱いてください！」

祈りを終えて帰途、「ああ、今日はいいい祈祷会だつた」と思いながら、体も軽く、駅の階段を二段ずつトントントンと上り、鼻唄をうたいながら家路へ急いだ。先生が「祈りをもつて友人に渡してください」と言われた「エン・クリスト」第12号をまず3冊もらつて帰つた。かばんの中でこの小冊子たちが「今日はよく揺れるね」と語りあつてゐることだろう。

「感謝！」（12月5日付来信） 吉田栄（東京召団） （割愛）



「新たな愛と力を受けて」(12月1日付来信)

増田嶽男(裾野召団)

無限の主の御恩寵の内に開かれました秋の特集、感謝でした。貴召団の諸兄弟姉の溢れる御愛と奉仕に心底からの御礼を申し上げます。集会所に選ばれた御車会館に熱い生命の力と愛が満ち、集いました兄弟姉妹、御一人御一人がまた新たな愛と力を受けることができました。会場も本当に良い処が与えられ、とても感謝でした。年末、年始を一層、主に活かされて参り度く願って居ります。

奥田先生、召団皆様の主の御恵福、平安祈り、感謝。

(消息蘭)

○大橋留里子さん(学生)は10月31日(日)より、また、山口美音さん(学生)は12月19日クリスマスより、京都キリスト召団の集會に出席されるようになりました。どうぞよろしく。

○故・玉川ウメノ姉と親交のあった村井茂子姉(小池先生と同年のお生まれ)(メキシコ在住)が京都召団の集會テープを聴いて感激され、京都キリスト召団への入会を申し出られた。玉川姉のもとにあったテープをすべて聴かれた由。今後、京都から折々、テープをお送りすることになった。どうか異郷の姉をおぼえ、お便りを書いていただければ幸いです。

○白山章一兄は、1982年復活節より交野市山手のご自宅の一角に新しく設立された「ベタニヤ教会」に奉仕のため、京都キリスト召団より同教会へ転ぜられた。同地域での兄のご奉仕に恵み豊かならんことを!

○井上邦夫・妙子夫妻に京一郎君誕生。1981年7月19日ご結婚、同月29日、日本を発つてタンザニア・キリマンジャロに赴任された井上夫妻にちょうど一年後の1982年7月29日、長男が誕生。京都にちなんで京一郎君と命名されたとか。秋期特別集會には、一時帰国の折をえて、ご一家で出席され、一同、再会の喜びに満たされた。

○南里一博・伸子夫妻には、1982年12月30日にご長男誕生!

○光野清・美彌子夫妻には、同じく12月31日にご長女誕生!

なお、今年、土屋(東京)、岡原(札幌)、村岡(大阪)の各ご家庭にお子様ご誕生の予定。どうかお大切になさって元気な赤ちゃんが生まれますように!

○粟津冬峰姉(横浜)は、今春、専修学校を卒業して、新和内航海運株式会社に1月20日から勤務の由。(営業部営業一課)。

